

**研究室紹介**  
**INSTITUTION,**  
**MEMBERS AND**  
**WORKS**

## [研究室紹介]

## 関東学院大学工学部土木工学科河海研究室

川崎ひとみ  
宮村 忠



## はじめに

関東学院大学工学部は、経済学部と共に神奈川県横浜市六浦町に立地している。この六浦キャンパスと呼ばれる校舎の他に、関東学院大学には、文学部がある釜利谷校舎、法学部がある小田原校舎が存在する。

学制改革により、1949(昭和24)年に関東学院大学となり、経済学部経済学科と共に工学部機械工学科・建築学科が設置された。翌1950年には、青山学院大学の工学部を合併し、土木工学専攻を増設した。1956(昭和31)年に、土木工学専攻を土木工学科に名称変更し、1957年に工学部第二部建設工学科が設置された。大学院工学研究科修士課程土木工学専攻は、1968年に増設された。

工学部の教育理念・目標は、関東学院寄付行為第1条、大学学則第1条に基づき、「キリスト教に基づく人格の陶冶を旨とし、専門を中心とした教育・研究を行うと共に、高い視座と広い視野から物事を判断でき、かつ国際社会で活躍できる技術者の育成」とされている。

現在、土木工学科の学生は、各学年約120名、そのうち女子学生が1学年10~20人程度いる。本学科内に、生産基盤の整備を目的とした「建築系クラス」や、「計画・環境クラス」を設けている。卒業後は、公務員、建設業、コンサルタント業へとそれぞれ進み、毎年3、4人が大学院へ進学する。

## 本学科のカリキュラムについて

本学科は測量学、構造力学、水理学、土質工学、設計製図などといった土木としての普遍性の高い学問の基礎的部分のみを必修科目としている。新しい学科目として「マトリクス構造力学」「構造振動学」「コンピュータ製図」を配置した。カリキュラムは、土木技術者として要求される学科目を基礎から応用へと体系的に修得できる編成になっている。

本学科に設けられている「建築系クラス」では、上記の目的に沿うように生活基盤整備への応用能力の養成にも留意している。「計画・環境クラス」は、必修科目の基礎の上に、「特別講義Ⅰ~Ⅲ」(デザイン論、レクリエーション論、地球環境論、他テーマ多数、学科外の種々の分野の専門家に数回講義を依頼し、レポートを課すこと

を行っている)、生活に密着し、かつ土木の重要性を考慮した「土木計画学Ⅰ~Ⅴ」、「公害論」及び「都市再開発論」等を選択必修科目としている。いずれのクラスも、それぞれ卒業後の進路を想定して、それに合わせた適切な授業科目の履修モデルとなっているが、とりわけ「計画・環境系クラス」は女子の適性に合致したものであり、今後この分野における女性の社会進出を進める上で貢献するところが大きであろう。

## 宮村研究室の研究活動

宮村研究室は、現在M2が1名、M1が2名、4年生が10名で構成されている。本研究室は、主に河川を卒業研究のテーマとしている。河川は、多面的要素を持ちえるため、研究課題は自由だが、景観論や環境論にとどまらず、河川本来のあり方を自分なりに見つけるのを目的としている。

毎年、男子5~8名が1グループとなり、1河川についての研究をする。その研究結果を映像によって表現することを目的とし、4、5年前から約20分程のビデオを作成している。

平成7年卒業生は、『忘れられていた金沢八景~平潟湾と侍従川~』、平成8年卒業生は『創られた溪流~鎌倉・滑川~』をテーマとし、それ以前は相模川、鶴見川などを題材とした。

年間を通じて、その1河川を研究するが、映像で表現するにあたり、そのテーマに関する膨大な知識、さらには実地調査が必要となる。さらに、その中から、本質的なものを見極め、限られた枠の中で分かりやすく表現しなければならず、河川本来の奥の深さに加え、人に伝えることの難しさも学ぶというのが、卒業生の声である。しかし、その分、普段何げなく見ている河川について、その複雑とも言える歴史的背景や、地域性、また人との関わりなどを分かりやすく伝えていく。

また、毎年1~3名の女子学生が研究生の中に含まれるが、こちらもそれぞれ河川についての研究をしている。

テーマにより、アンケートを行うなど、手法は様々だが、実地調査や建設省へのヒアリングなど、基本的な活動は共通している。何よりもまず、現地に足を運び、疑問をつくり、その疑問に対する考えをまとめるのが本研究室の卒業研究における姿勢と言える。

#### おわりに

河川工学を学ぶにあたり、常に私達は「川とは？」と疑問に思う。長い歴史の中で人類と関わり、文化を育み、時には猛威をふるい、時には恩恵を与える。「河道」ではない「河川」とは、そういったものだろう。しかし、現

代の私達は、思想の上でも河道化している河川に何の疑問も持たずに暮らしている。昨今、親水性、多自然型といった言葉をよく耳にするが、その目的は、人間と河川との歴史的な営みを気付かせることにあるのではないだろうか。そしてそれに気付いて初めてこれから川と人間とがどう付き合うべきかを考えられるのではないだろうか。結局、「川とは？」の疑問からうまく抜け出せないまま卒業研究を終える事が多いが、川と親しむ楽しさや川の持つ様々な魅力を少しでも伝えられたらいいと出来上がったビデオを見ながら思う。

(1996.4.11 受付)